

ケアの人間学 「ケアを受ける側の視点から」

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

近年、「ケア」という言葉が氾濫している。ケアは、広範な意味をもつ概念ゆえに、便利に使われ、十分な理解もないまま言葉がひとり歩きしている。「ケア」に含意された問題に目を向ける必要がある。

「ケア」という言葉には「気にかかること」「心配」「不安」という意味(気懸り)と、「気にかけること」「注意」「配慮」「世話」「保護」という意味(気遣い)がある。本論文では、「ケア」は「気遣い」であると同時に「気懸り」でもある」という語彙の二面性からケアを考察しようとするものである。

これまでの多くのケア論は、医療や看護領域における「ケアをする側」からのケア論であった。しかし、ケアは限られた領域や専門家だけの問題ではない。すべての人々の問題である。

ケアとは何かを明らかにするには、他者へのケアを問題とするだけでなく、最も「気懸り」な存在である自分自身へのケアを出発点として考察する必要があると考える。ケアは、「ケアをする」だけでなく、「ケアを受ける」意味が含まれている。人間はケアを受けることによって、ケアの本質を会得し、ケアすることができるようになるのである。

一方、ケアは「する側」・「受ける側」という人間の相互主体的な関係性として捉えることができる。しかし、この点においてもこれまで「する側」からの論理によって、「受ける側」は「される」という受動的な存在として位置づけられ、考察されてきた。その結果、「受ける側」にとっての、主体的能動的な側面の考察がないがしろにされてきた。ケアを自分の心にある(心身両面にわたる)問題として考察するためには、「受ける側」にとってのケアの意義が考察されなければならない。

本論文の課題は、こうした問題意識に立って、まず第?章において「ケアの現状と課題」を提示し、次いで第?章でケアの思想として「自己へのケア」、「他者へのケア」、「ささえあい」について考察し、さらに第?章では具体的な「ケアの実践」を取り上げ、最後に第?章では以上の考察をふまえて、「ケアの人間学的意味」を明らかにすることにある。